A young boy is sitting on a large, wet rock in a stream. He is wearing a blue long-sleeved jacket, black pants, and a yellow wide-brimmed hat. He is smiling broadly, looking towards the camera. The water is splashing around him, and the background is filled with lush green trees and foliage. The scene is bright and sunny.

身体運動文化学会第28回大会 自然と人間

令和5年12月2日・3日
於：天理大学体育学部

身体運動文化学会第 28 回大会

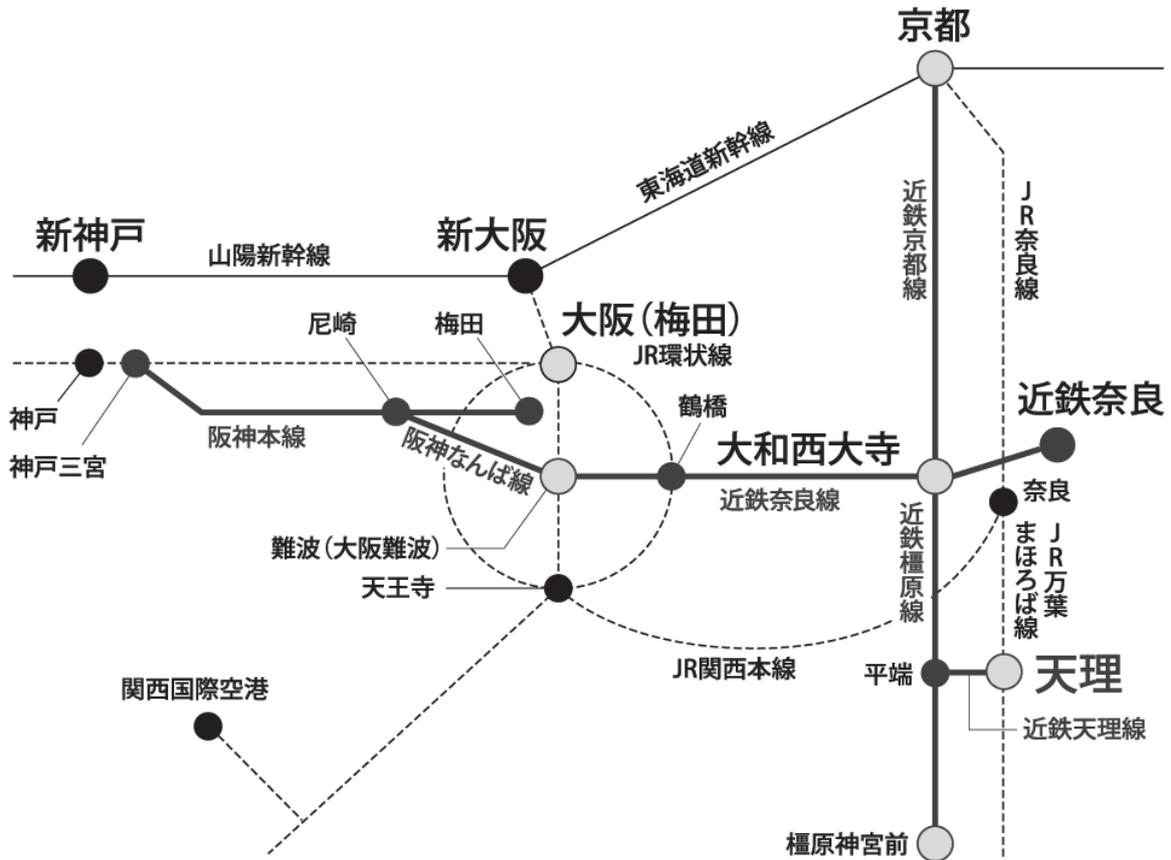
自然と人間

目 次

1. 会場案内	2
2. 会長挨拶 前林清和 (神戸学院大学)	4
3. 大会実行委員長挨拶 軽米克尊 (天理大学)	5
4. スケジュール	6
5. 基調講演 「夢と冒険 今リーダーに求められる力」 辰野 勇先生 (株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO)	7
6. シンポジウム 自然の中で育む身体	8
わが国における野外教育—その定義と源流をさぐる— 蓬田 高正先生 (天理大学体育学部准教授)	
森のようちえんで育つ子どもたち—奈良県で活動を行う森のようちえんの事例から— 山本 展明先生 (奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任助教)	
一人十色のスポーツライフ—人生にとって健康は最初の条件である— 中谷 敏昭先生 (天理大学体育学部教授)	
7. 一般研究発表	13

【会場案内】

会 場：天理大学（体育学部キャンパス）
住 所：〒632-0071 奈良県天理市田井庄町 80
アクセス：



①大阪難波から（所要時間：約1時間）

大阪難波（近鉄奈良線近鉄奈良行き）-大和西大寺駅（近鉄橿原線天理行き）-天理

②京都から（所要時間：約1時間）

京都（近鉄京都線天理行き）-天理

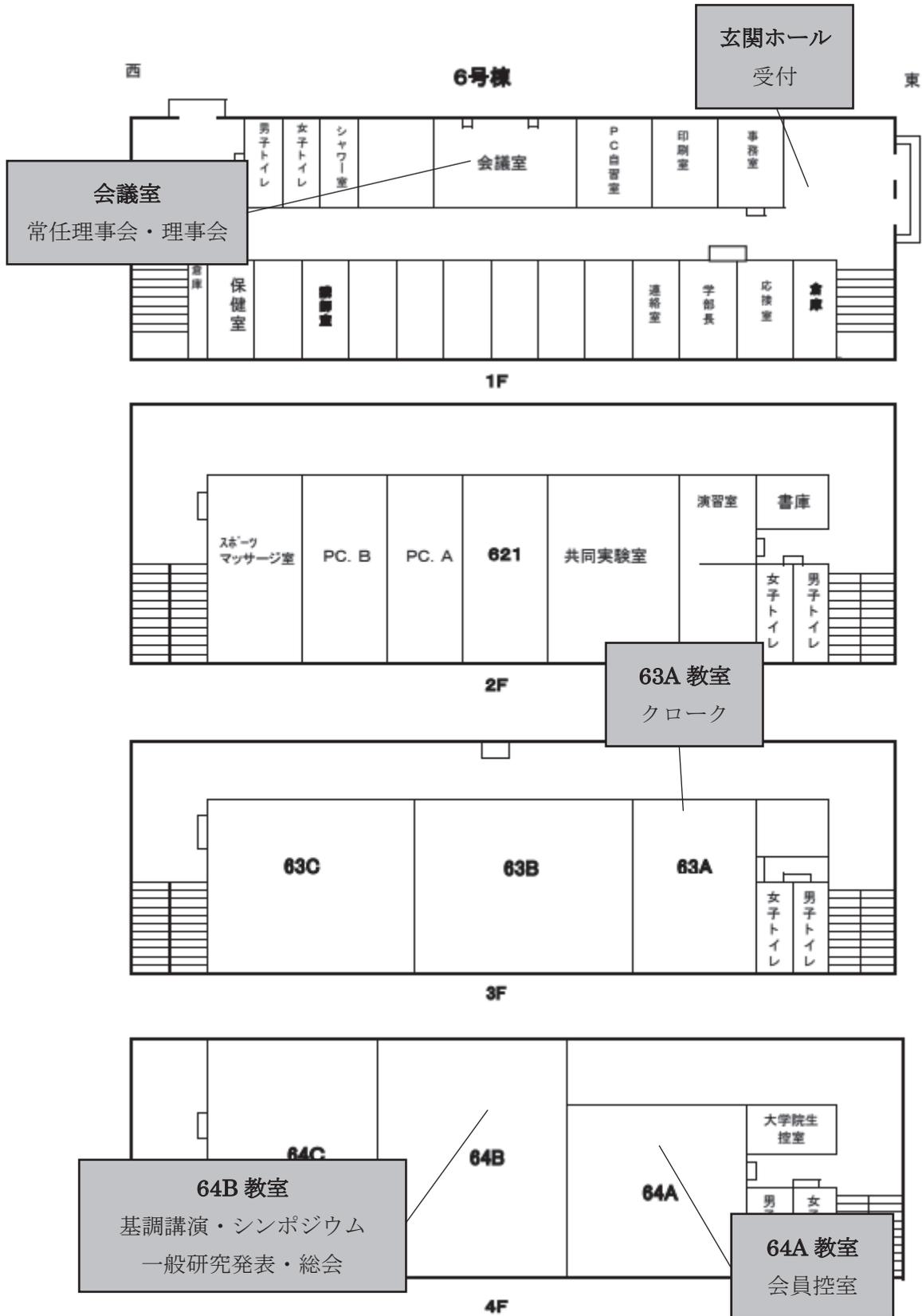
③神戸から（所要時間：約1時間40分）

神戸三宮（阪神本線近鉄奈良行き）-大和西大寺駅（近鉄橿原線天理行き）-天理

※近鉄京都線・近鉄橿原線で橿原神宮前行きに乗車の際は平端駅下車、天理行きに乗り換え。

天理駅より徒歩5分。体育学部キャンパス正門左手の6号棟。

【天理大学体育学部六号棟案内図】



ごあいさつ



身体運動文化学会
会長 前林清和（神戸学院大学 教授）

身体運動文化学会第 28 回大会開催にあたって

会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今回の大会は天理大学で開催します。天理大学で大会を開催するのは、2016 年の第 21 回大会以来、7 年ぶりです。昨年亡くなられた二杉先生が亡くなる寸前まで、天理大学のバスケットボール部の監督として、活躍されていたことを思い出しながら、今でも体育館に行けば選手たちを指導されているのではないかと、ふと思ってしまいます。

さて、今回のテーマは「自然と人間」です。私たち人間は、自然の中で生きています。というより、自然の一部として存在しているのです。Culture の語源は「耕す」を意味するラテン語の colere です。まさに、文化は自然の中での人間の営みであり、身体運動文化は自然の中での心身の営みなのです。基調講演ではアウトドアで有名なモンベルの代表取締役会長の辰野勇氏をお招きし、またシンポジウムではシンポジストとして天理大学の中谷敏昭先生、蓬田高正先生、奈良教育大学の山本展明先生、コメンテーターとして辰野氏と天理大学の岡田龍樹先生にご登壇いただき、自然と人間について、大和のまほろばで大いに語って頂きます。

最後になりましたが、天理大学には開催大学として様々な方面で多大のご協力、ご尽力を賜りました。さらに、天理大学の先生方を中心に大会実行委員会が構成され、多くの企業、関係各位からご協力いただきました。ここに改めて感謝とお礼を申し上げます。

本大会が実り多く、また成功裏に終わりますことを祈念して、ご挨拶に代えさせていただきます。

ごあいさつ



身体運動文化学会第 28 回大会
実行委員長 軽米克尊（天理大学体育学部 准教授）

身体運動文化学会第 28 回大会をここ天理大学体育学部にて開催させていただき運びとなりました。第 21 回大会「日本人と身体運動」ぶりの開催となります。

今大会のテーマは「自然と人間」といたしました。「孟母三遷」「霧の中を行けば覚えざるに衣湿る」「三年勤め学ばんよりは三年師を選ぶべし」といった言葉があるように、古来より人間にとって環境の重要性が語られてきました。近年ではスポーツ界において、学習者がスキルを習得しやすい練習環境を設定する「エコロジカル・アプローチ」という理論を耳にします。昔も今も人間にとって重要とされる環境。今回はその中でも「自然」にフォーカスをあて、自然の中での身体運動が人間をどのように成長させるのか、議論していく学会大会にしたいと考えています。大和青垣の山々をはじめとする豊かな自然に抱かれ古からの歴史や文化が今も息づくここ天理市はまさしく今回のテーマに合致した場所であります。

はじめに株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO・本学客員教授でいらっしゃいます辰野勇先生に基調講演をしていただきます。辰野先生にはこれまで本学において野外活動実習など授業を通じた学生教育や、文科省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制設備事業」の一環としてインターンシップ登山「立山三山縦走路登山」に従事していただいております。自然を相手に長らく活動されてきたスペシャリストである辰野先生のお話は学会員の方々にとっても示唆に富むものであると確信しております。

続いて、「自然の中で育む身体」と題したシンポジウムを開催いたします。3名のシンポジストの先生方それぞれのお立場から、自然の中で身体運動をすることでどのような「身体」がつくられていくのかをお話いただき、自然との関わりから生まれる身体運動の可能性について議論していきたいと考えています。

最後に今大会を開催するにあたり、会場をご提供くださった天理大学をはじめ、ご後援・ご協賛をいただいた多くの企業および関係各位、さらに学会の皆様方に感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

【スケジュール】

12月2日(土)

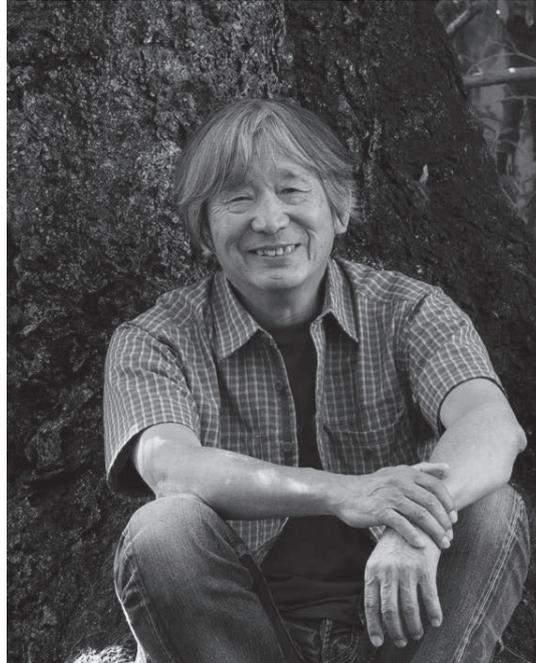
- 11:30～ 常任理事会・理事会
- 12:00～ 受付
- 13:00～ 開会・会長挨拶
- 13:05～14:35 基調講演 「夢と冒険 今リーダーに求められる力」
辰野 勇先生（株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO）
- 14:45～17:15 シンポジウム 「自然の中で育む身体」
シンポジスト
蓬田 高正先生（天理大学体育学部准教授）
山本 展明先生（奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任助教）
中谷 敏昭先生（天理大学体育学部教授）
コメンテーター
辰野 勇先生（株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO）
岡田 龍樹先生（天理大学副学長）
コーディネーター・司会進行
北澤 太野（天理大学体育学部）
軽米 克尊（天理大学体育学部）

12月3日(日)

- 09:00～ 一般研究発表（発表 15分 質疑応答 5分）
- 12:30～ 総会（優秀論文賞ならびに若手研究者奨励賞表彰式）

【基調講演】

「夢と冒険 今リーダーに求められる力」



辰野 勇 (たつの・いさむ) 先生

1947年 大阪府堺市生まれ

1969年 アイガー北壁日本人第二登を達成

1970年 日本初のクライミングスクールを開校

1975年 株式会社モンベルを設立

現在、株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO、山岳雑誌『岳人』編集長、天理大学客員教授、
京都大学特任教授。

受賞歴

1994年 関西ニュービジネス協議会・起業家大賞

1995年 日本ニュービジネス大賞通商産業大臣賞

1999年 イタリア山岳会・2000年記念賞

2005年 第1回デザインエクセレントカンパニー賞

2015年、2016年 環境省「グッドライフアワード」

2016年 第36回毎日経済人賞

2021年 紺綬褒章

2023年 国際ホワイトウォーター殿堂入り

シンポジウム

自然の中で育む身体

開催趣旨

自然は、人間が生きていく上で切っても切れない存在である。人間の生活に恩恵をもたらしてくれながらも、時には地震・火山噴火・大雨・台風などを引き起こし、我々に容赦なく襲いかかる。そういった意味で人間の歴史は、自然との戦いでもあったといえ、人間は自然を克服しようとしてきた。その結果行き着いたのが、自然環境の破壊であろう。しかし、昨今、若者を中心に、郊外への移住あるいはキャンプブームといった、自然への回帰を求める現象もみられる。いずれにせよ、自然が人間の生活に深く関わっていることは紛れもない事実であり、むしろ人間も自然の一部であると言うべきかもしれない。特にわが国は四季が織りなす美しい自然に恵まれた独特の風土を有しており、自然と共存することで発展してきた国である。

昨年の前回大会「災害とスポーツ」では、ある種、自然の「恐ろしさ」に目が向けられたが、今大会では反対に、自然との「共存」や自然から受ける「恩恵」という側面に目を向けてみたい。

ここ奈良県は自然豊かな紀伊半島に位置する。南部や東部の山間部には手付かずの大自然が広がり、県民の約9割が住んでいる大和平野においても、田園が広がり、古代遺跡と相まって自然と文化が融合した他に類を見ない独特の地域となっている。ここ奈良は、「人間にとっての自然を考える」にあたって絶好の場である。

本シンポジウムでは、自然の中での教育や身体運動について議論を行う。奈良県は県内全域に自然体験活動ができる施設が点在し、さらに令和4年度に「奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度」が制定されるなど、比較的自然教育・自然保育が展開されやすい地域であるといえる。特に幼少期の自然体験は、自己肯定感や自立的・主体的に行動する力など、テストで測ったり数値化したりすることができない「非認知能力」を高めるのに役立つと言われている。これからの予測不能な社会を生き抜く力を養うために自然の中での教育や身体運動がいかに役立つのか、野外教育・自然保育・体力学のスペシャリストをシンポジストとしてお招きし、議論を深めていきたい。

シンポジスト

蓬田 高正先生（天理大学体育学部准教授）

山本 展明先生（奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任助教）

中谷 敏昭先生（天理大学体育学部教授）

コメンテーター

辰野 勇先生（株式会社モンベル代表取締役会長兼 CEO）

岡田 龍樹先生（天理大学副学長）

コーディネーター・司会進行

北澤 太野（天理大学体育学部）・軽米 克尊（天理大学体育学部）

①わが国における野外教育－その定義と源流をさぐる－

蓬田 高正（天理大学体育学部准教授）

自然環境を教材として行われている野外教育。体験活動の重要性から野外教育が注目を浴び、各中央省庁をはじめ、自治体、民間、企業等、様々な機関でプログラムの提供や環境整備がなされてきた。野外教育の目標は、一般的に自然に対する興味・関心の喚起、自然体験活動の楽しさや技術の習得、自主性・協調性・社会性・創造力の育成などが挙げられる。また青少年を対象とした野外教育では、全人的成長を促す教育であるとも言える。そのため、これまでに野外教育あるいは自然体験活動と称して、種々雑多な活動が実施されてきた。しかしながら、今後野外教育がさらに発展し広く浸透していくためには、野外教育とは何なのかを整理することが必要であり、現在野外教育研究の分野で野外教育の体系化の議論が進められている。それを受けて、今回はわが国における野外教育の源流を修験道に求める議論や、野外教育の体系化に関する研究を紹介して、野外教育とは何なのかを考えてみたい。



蓬田 高正（よもぎだ・たかまさ）

天理大学体育学部准教授。筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了。博士（体育スポーツ学）。専門は野外教育、青少年教育。主な著書に「野外教育における安全管理と安全学習－つくる安全、まなぶ安全－」（分担執筆）杏林書院、「スキー研究 100年の軌跡と展望」（分担執筆）道和書院。

②森のようちえんで育つ子どもたち—奈良県で活動を行う森のようちえんの事例から—

山本 展明 (奈良教育大学 ESD・SDGs センター特任助教)

みなさんは「森のようちえん」という保育を知っていますか？

森のようちえんはデンマークが発祥とされる自然保育の一つです。この森のようちえんの活動は、近年日本でも活発に行われており、この奈良県においてもその活動を行う園があります。この森のようちえんについての概説と、私がフィールドワークを行ってきた奈良県のある森のようちえんでの保育風景の紹介を行いつつ、私自身のフィールドワークの経験と事例から、森のようちえんで育つ子どもたちの姿について論じたいと思います。



山本 展明 (やまもと・のぶあき)

奈良教育大学 ESD・SDGs センター 特任助教。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程に在学中。専門は発達心理学と保育学。森のようちえんでのフィールドワークの中で、子どもたちの心がどのように育っていくのかについて研究。森のようちえんに関連する主著としては、「持続可能性の観点からみた森のようちえん」森のようちえん ウィズ・ナチュラ、「接面が立ち上がるとき—『森のようちえん』における私と子どもの関わりから—」(鯨岡峻・大倉得史編著『「接面」を生きる人間学—「共に生きる」とはどういうことか—』 ミネルヴァ書房. など。

③ 一人十色のスポーツライフ人生にとって健康は最初の条件であるー

中谷 敏昭 (天理大学体育学部教授)

体力は人生の4分の1で発達し、残りの4分の3は低下する。そのため、体力のピークをできるだけ高くし、ピーク後はその低下を緩やかにする必要がある。子どもの体力低下が問題とされるのは体力のピークが高くないこと、超高齢社会が問題とされるのは虚弱高齢者が増えることであり、いずれも体力の問題と捉えることができる。武者小路実篤は、『人生論』で「人生にとって健康は目的ではない、しかし最初の条件なのである。」

(人生論)と説いている。豊かで楽しい人生を送るためには健康であることが条件であり、そのために運動やスポーツの実践は必要とされる。本シンポジウムでは、自然の中で楽しむスポーツを含む一人十色のスポーツライフについて考えてみたい。



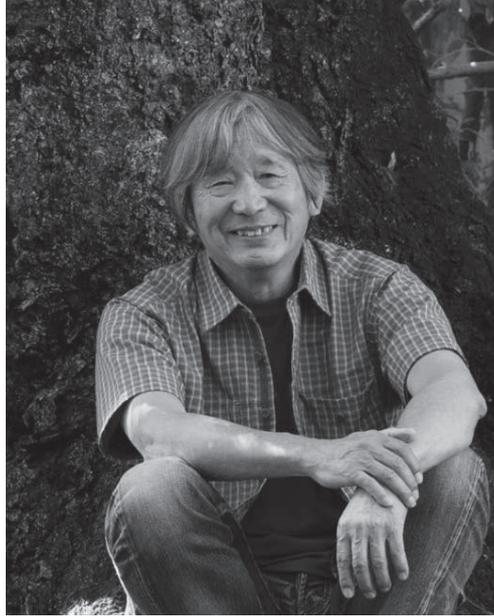
中谷 敏昭 (なかたに・としあき)

天理大学体育学部教授, 博士 (医学) .

筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了筑波大学体育センター文部技官・助手を経て現職, 専門は体育測定評価学, 体力トレーニング論, バドミントン. 日本体育測定評価学会副理事長, 日本バドミントン学会会長, 大学スキー研究会副会長. 主な著書に『健康・スポーツ科学教科書シリーズ』(編集) 「体力学」(分担執筆) 化学同人, 『中学体育実技書 ワンダフルスポーツ (バドミントン)』新学社, 『ノルディック・ウォークの科学的基礎』(分担執筆) 全日本ノルディック・ウォーク連盟.

コメンテーター

辰野 勇 (たつの・いさむ) 先生



岡田 龍樹 (おかだ・たつき) 先生



天理大学副学長。人間学部人間関係学科生涯教育専攻教授。広島大学教育学部卒業、広島大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程後期退学。教育学修士。専門は、教育学、社会教育学、生涯学習論。主な研究活動として、『生涯学習社会の構築』（共著、福村出版）、「『必要課題論』再考」（『天理大学生涯教育研究』No. 11）、「奈良県における地域と学校の連携・コミュニティスクール」（『月刊社会教育』No. 758）など。

一般研究発表抄録集

スケジュール

期日：12月3日（日）09:00～

会場：天理大学体育学部 64B 教室

座長：大石 純子（筑波大学）

時間	発表者	タイトル
09:00～09:20	井上 涼 (東海大学大学院)	リバイバル剣道の現状 —雑誌・Web・SNS からの分析—
09:20～09:40	川井 良介 (日本大学)	スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業による 受講者の社会的スキルと共感性の変化
09:40～10:00	馬越 千里 (聖カタリナ大学)	女性剣道と昇段 —雑誌・WEB からの分析—

座長：軽米 克尊（天理大学）

10:00～10:20	中越 泰士郎 (筑波大学大学院)	新当流槍術に関する一考察
10:20～10:40	寒川 祥 (筑波大学大学院)	佚斎樗山の思想形成に関する一考察 —熊沢蕃山からの影響に着目して—

座長：阿部 弘生（東北文教大学）

10:40～11:00	筒井 雄大 (国際武道大学)	大日本武徳会における武術教育に関する一考察 —青年教育に着目して—
11:00～11:20	堀川 峻 (筑波大学)	20世紀初頭の欧州における武士道論に関する一考察
11:20～11:40	林 洋輔 (大阪教育大学)	「体育 Study of Taiiku」とその哲学基盤、Well-Being

座長：齋藤 実（専修大学）

11:40～12:00	金子 竜大 (天理大学)	反射マーカーを用いた伏臥位における体幹側屈角度の計測
12:00～12:20	松本 秀夫 (東海大学)	海洋スポーツ実践者のワークライフインテグレーションと Well-being の関係 —居住地を焦点とした質的分析—

リバイバル剣道の現状 -雑誌・Web・SNS からの分析-

○井上 涼 (東海大学大学院) 榎 優哉 (東海大学附属相模高等学校中部部)
天野 聡・笹木 春光・松本 秀夫 (東海大学)

I. 研究背景と目的

剣道は老若男女問わず、様々な目的で活動を行っている。しかし、「進級・卒業・部活動の引退・結婚・育児・介護」などの理由から活動を「中断」「止める」人も数多く存在している。このような剣道人口減少は、剣道活動から退き、中止することが減少に繋がると指摘され、全日本剣道連盟¹⁾は、少年少女・中年から高齢者・女性の剣道人口増加を推進している。そして木原²⁾は、若者の剣道離れの特徴を経験年数から示し、剣道特有の不快感・文化的側面・環境・指導者の工夫などを指摘している。また、関³⁾は、年齢や環境に合わせた新たな剣道の特性の発見や価値観の変革による再開を指摘している。このような状況下で近年、剣道愛好者の「リバイバル剣道」(以下リバ剣)が注目をされている。リバ剣とは、社会人剣士が、剣道活動を一時何らかの理由で「引退」「中断」したが、何かのきっかけで活動を再開することと捉えることができる。これまで女性剣士の活動休止についての検討はされているが、これらリバ剣についての検討はされていないことから、その活動、動機や目的の現状を明らかにすることは重要であると考えられる。

本研究は「雑誌」「Web」「SNS」にある各種記事・投稿を資料とし、剣道活動を「中断」「止めた」リバ剣実践者の活動再開に関する現状を明らかにすることを目的とする。

II. 調査対象

調査対象は、2023年11月までの雑誌・Web・SNSに公開された「リバ剣」「リバイバル剣道」についての記事とした。雑誌は「月刊剣道時代(以下剣道時代)」「月刊剣道日本(以下剣道日本)」、全剣連発行「月刊剣窓(以下全剣連広報)」を分析対象とした。また、「再燃」や「ブランク」について記載された記事も対象とした。Webは、「リバ剣」「リバイバル剣道」のキーワードで検索した(google:約209,000件、yahoo Japan:約211,000件)。SNSでは、「Facebook」「X」「Instagram」を対象として、「#リバ剣」「#リバイバル剣道」で検索をかけ、投稿件数や投稿内容が関連あるものを対象とした。本調査はプライバシー設定されている非公開アカウントの投稿は確認できないため対象外とした。

III. 結果及び考察

「リバ剣」「リバイバル剣道」はWeb掲示板で「リバイバル組」⁴⁾や「リバイバル剣士」⁵⁾などが2001年に初出していることから、2000年ごろに使われ始めた可能性がある。

雑誌には、剣道時代にリバ剣が2006年5月号のコラム⁶⁾で取り上げられ稽古会や稽古環境・ライフストーリーに関連した境遇などについて書かれている。同様に全剣連広報では、「日々の修業」⁷⁾や「一生涯の剣道」⁸⁾、剣道活動に修業的な意味や生涯を通した剣道の意味を含んだ内容が取り上げられている。また、剣道活動を中断する女性について佐藤は「出産・育児・介護等で剣道から離れざるを得ない」⁹⁾ことを指摘している。このように女性の剣道休止・中断はリバ剣が使用される以前から存在したものであり、女性剣士の休止に関しては、リ

バ剣とは区別して考える必要があるのかもしれない。Web サイトで「リバ剣」「リバイバル剣道」を検索すると、ブログ、剣道具販売サイト、個人販売サイト等がヒットする。また、リバ剣を題材にした YouTuber が存在し、登録者数は 1 万人を超え、総再生数約 700 万回が再生されている。SNS には、リバ剣を行った人たちの試合や昇段、日記的な稽古、交流（旧友の誘い）、親が自身の子どもと剣道を再開している投稿もある。他には、技能の向上や健康志向まで幅広い投稿が確認できる。このように活動を投稿することで動機づけを高め「する」「見る」「支える」と言った多様な楽しみ方による剣道活動の充実を図っていると考えられる。そして、一緒に活動する人々らのコミュニティに関する投稿も多い。大会や昇段審査など目に見える成果だけでなく、余暇活動やコミュニティ交流が目的で活動していることも推察される。

メディアの影響としては 2018 年 10 月「NHK 相葉雅紀のグッと！スポーツ」で「リバ剣」が取り上げられ番組放送後、SNS で多くの反響があり「リバ剣」が知られるきっかけになっている。コロナ後の現在、SNS での投稿数は増加傾向にあり、剣道活動やリバ剣の投稿が行われやすい環境に戻ったと考えられる。

IV. まとめ及び今後の課題

本研究はリバ剣の現状について分析を行った。その結果、活動再開は、旧友の誘い、Web 掲示板、メディア、仕事の余暇、子どもの開始など様々なケースが挙げられた。また、再開の目的は剣道への考え方によって複数のケースがあり、仕事の息抜きにする場合もあれば、人生を通した修行の一環として昇段や自己研鑽の場合もある。また、女性剣士の「出産・育児・介護」からの再開は、従来から指摘されていたものであり、近年のリバ剣に含まれるかは不明である。そして、再開後の継続には「コミュニティ」「仕事」「家庭」「修行（昇段）」などが深く関係していると考えられ、中断するまでの環境や再開してからの環境が大きく関わっている可能性がある。今後は、リバ剣を行っている剣道愛好者の「中断に至った経緯」と「再開後の継続」の関係に注目した質的調査を行うことが課題である。

引用文献

- 1) 全日本剣道連盟《基本計画》次世代への継承に向けて, 2020
http://basic_plan_for_next_generation.pdf (kendo.or.jp) (2023 年 11 月 2 日閲覧)
- 2) 木原資裕ほか, 剣道実践にともなう阻害要因の検討-経験年数による違いを中心に-, 武道学研究 28(1), pp33-46, 1995
- 3) 関伸夫ほか, 社会人剣道愛好者が中長期間の剣道実施離脱に至る要因, 武道学研究 55(2), pp55-65, 2023
- 4) Web 掲示板いちに会〈考え方の違い〉(2001 年 11 月 19 日投稿)
<https://ichinikai.com/bbs2/314971923828125.html> (2023 年 11 月 2 日閲覧)
- 5) Web 掲示板いちに会〈リバイバル剣士の皆さん!〉(2001 年 3 月 10 日投稿)
- 6) <https://ichinikai.com/bbs2/96051025390625.html> (2023 年 11 月 2 日閲覧)
- 7) ハンドルネーム うし, コラム〈K-net の快樂㊦〉, 月刊剣道時代, No405 号, p160, 2006
- 8) 遠藤勝雄, 剣道指導の諸課題剣道人口の減少, 月刊剣窓, 第 457 号 p21, 2019
- 9) 佐藤毅, 剣道修行の段階とその心構え, 月刊全剣連広報, 第 76 号 p8, 1987
- 10) 佐藤厚子, 女性委員会の設立について, 月刊剣窓, 第 457 号 p22, 2019

スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業による受講者の社会的スキルと共感性の変化

川井良介（日本大学文理学部）、菅野慎太郎（日本大学松戸歯学部）

1. 背景と目的

近年、大学生や大学入学者の自己肯定感やコミュニケーション能力の低さ、対人緊張を原因とした疲労感や抑うつといったメンタルヘルスの悪化が問題となっている（三宅・岡本，2015；高柳ら，2017）。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大による影響で、対面が主であった大学生活や友人とのコミュニケーション形態に変化が生じたことで、うつ病やうつ状態を呈する大学生が増加（梶谷ら，2021）している現状にある。

このような問題を解決するための一方策として、大学における体育実技科目（以下、大学体育）の活用が挙げられる。公益社団法人全国大学体育連合（2010）によれば、大学体育を受講することによって、身体的・精神的・社会的効果が得られることが報告されているため、大いに活用すべきである。筆者らが所属する日本大学文理学部では、健康・スポーツ教育科目として必修科目に位置づけられ、講義科目を健康・スポーツ教育論（以下、健スポ論）、実技科目を健康・スポーツ教育実習（以下、健スポ実習）としている。川井ら（2023）の研究では、対人的な競技特性の面白さを学習することに加え、受講者の共感性を育むことを期待し、健スポ実習においてスポーツチャンバラ（以下、スポチャン）を教材として取り扱い、受講前後の社会的スキルおよび共感性の変化について検討している。しかしながら、川井ら（2023）の研究ではコントロール群が設定されておらず、スポチャン授業の受講有無による比較ができていないため、検討の余地があると言えよう。

そこで本研究では、スポチャンを教材とした大学体育の受講有無によって、受講者の社会的スキルや共感性にどのような変化が生じるかを比較・検討することを目的とした。

2. 研究対象および調査方法

調査対象者は、2023年度前学期（1回/90分の授業を15回）に本学部で開講された実技科目である健スポ実習（スポチャン）（以下、スポチャン授業）を受講した学生のうち、質問紙の回答に不備がなく、対面形式で授業に参加した38名（男性：25名、女性：13名）をスポチャン群とした。また、同学期に開講された講義科目である健スポ論を受講した学生のうち、前学期中に健スポ実習を受講していない者を対象とし、質問紙の回答に不備がなかった63名（男性：37名、女性：25名、性別不明：1名）をコントロール群とした。本研究では、授業の第1回目と第15回目の2時点で調査を実施し、第1回目で収集した回答を「Pre」、第15回目で収集した回答を「Post」とした。なお、本研究は日本大学文理学部研究倫理審査委員会の承認の下に実施した（承認番号：05-02）。そして、本研究では受講者の社会的スキルと共感性の変化に違いがみられるのかを検討するため、社会的スキル測定尺度（以下、KiSS-18）（菊池，1988）と多次元共感性尺度10項目短縮版（以下、MES-SF）

(木野・鈴木, 2016) の 2 種類の質問紙を用いて, 調査を実施した. 収集したデータについては, 混合計画 (授業・時間) の 2 要因分散分析を実施した.

3. 結果

KiSS-18 の結果について, 全ての下位尺度 (初歩的なスキル, 高度なスキル, 感情処理のスキル, 攻撃に代わるスキル, ストレスを処理するスキル, 計画のスキル) と合計得点で有意な交互作用が認められた ($p<.001$). その後の検定として多重比較検定を行った結果, 全ての下位尺度と合計得点は, スポチャン群において Pre より Post が有意に高い値を示した ($p<.001$). また, 初歩的なスキル, 高度なスキル, 感情処理のスキル, ストレスを処理するスキル, 計画のスキル, 合計得点では, いずれも Pre においてコントロール群がスポチャン群より有意に高い値を示した ($p<.05$). そして, 初歩的なスキル, 高度なスキル, 攻撃に代わるスキル, ストレスを処理するスキル, 合計得点では, いずれも Post においてスポチャン群がコントロール群より有意に高い値を示した ($p<.05$).

MES-SF の結果について, 他者指向的反応, 想像性, 視点取得, 自己指向的反応に有意な交互作用が認められた. その後の検定として多重比較検定を行った結果, いずれもスポチャン群が Pre よりも Post で有意に高い値を示し ($p<.001$), Pre ではスポチャン群よりもコントロール群が有意に高い値を示した ($p<.05$). また, 自己指向的反応ではコントロール群において Pre よりも Post で有意に高い値を示した ($p<.01$). そして, 視点取得では Post においてスポチャン群がコントロール群よりも有意に高い値を示した ($p<.01$).

【参考文献】

- 梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響: 文献および臨床経験からの考察. 健康科学, 43 : 1-13.
- 川井良介・菅野慎太郎・山崎紀春 (2023) スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業における受講者の共感性および社会的スキルの変化. 日本大学 FD 研究, 10 : 1-13.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル (第 3 版). 川島書店: 東京, 187-204.
- 木野和代・鈴木有美 (2016) 多次元共感性尺度 (MES) 10 項目短縮版の検討. 宮城学院女子大学研究論文集, 123 : 37-52.
- 公益社団法人全国大学体育連合 (2010) 体育系学術団体からの提言 2010 : 21 世紀の高等教育と体育・スポーツ. <https://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/8c9bfeb587647634449d0e0db54f2ebc.pdf>, (参照日 2022 年 4 月 18 日)
- 三宅典恵・岡本百合 (2015) 大学生のメンタルヘルス<特集>現代の若者のメンタルヘルス. 心身医学, 55 (12) : 1360-1366.
- 高柳茂美・杉山佳生・松下智子・福盛英明・眞崎義憲・一宮厚・林直亨・淵田吉男・熊谷秋三 (2017) 大学生のメンタルヘルスの実態とその関連要因に関する疫学研究—九州大学 EQUISITE Study—. 厚生 の 指 標, 64 (2) : 14-22.

女性剣道と昇段
—全剣連データ・雑誌・WEBからの分析—

馬越 千里（聖カタリナ大学） 榎 優哉（東海大学附属相模高等学校中等部）
笹木 春光・天野 聡・松本 秀夫（東海大学）

I. 研究の背景および目的

全日本剣道連盟（以下、全剣連）全剣連の定める剣道の称号・段位制度は、剣道の技量を示す1つの指標であり、個人の剣道修行の目標の1つともされている。段位制度は、これまでの剣道界の普及・発展に寄与してきた。一方で、少子化による人口減少に伴い、小・中学生の剣道人口は長期にわたり減少が続いている。全剣連の公表によると国内の中学生の剣道初段登録者数は1989年度に約6.2万人であったのに対して2022年度には2.6万人とほぼ半減している¹⁾。その中で剣道の高段位審査の受審者数については、過去10年間で年間16,000人前後と、ほぼ一定的に推移しており、中でも女性の昇段者が増加傾向にあるとされている。

我々はこれまで、高段位の女性剣道実践者を対象に半構造化面接を行い、剣道の実践や継続と昇段との関連を検討しているが十分ではない。女性の昇段者が増加傾向にある今、女性剣道と昇段との関連について明らかにすることは重要であると考えられる。

このような現状を踏まえ、本研究は近年の高段位審査と女性の実態について全剣連の受審者データをもとにその推移を明らかにし、さらに剣道関連の雑誌やWEBにおけるインタビュー記事や特集記事などを収集して質的に分析し、女性剣道と昇段の関連について考察することを目的とする。

II. 研究方法および研究資料

高段位審査における女性の実態について、全日本剣道連盟が集計した受審者数と合格者数の統計データをまとめて分析する。次に、調査対象として2018年～2022年の月刊剣窓、剣道時代、剣道日本、FINE LADIES KEDNO WORLD WIDEに掲載された女性剣士と昇段に関する記事を収集する。関連するキーワード・用語を検索可能な状態にし、「昇段」に関連する用語や、それらの単語に付随して記されている注目すべき文脈を抽出する。これらから読み取れる女性剣道と昇段との関連について分析・考察を行う。

III. 結果および考察

高段位審査における女性の実態について、2008年～2022年の統計データについてまとめた結果、六・七段審査の受審者数については図1のとおり新型コロナウイルス感染症拡大による行動制限などの影響を受けて減少したとされる2020年～2022年を除いては微増

していた。八段審査の受審者数については図 2 のとおり顕著な増加傾向にあることが明らかとなった。合格者数についても、図 3 のとおり、六・七段審査については新型コロナウイルス感染症拡大の影響による一時的な減少は見られたものの増加傾向であった。八段審査についてはこれまで女性の合格者は存在しない。

雑誌・WEB における記事の分析結果について、女性剣士が剣道を始めた時期は、30・40代以降が多かった。例として「44歳の時に、主人の転勤で移住。近くの道場の館長先生よりお誘いを受け、娘と一緒に剣道の道に進むことになりました。」²⁾ といったように、子どもと同じ稽古環境で始めるケースも多かった。

また昇段の取り組みについては、「六段合格から七段までの道のりが長く、20年かかりました。」³⁾、「七段審査の受審は20回を超えました、そこでもう回数を数えなくなりました(笑)」⁴⁾、といったように、昇段審査に複数回挑戦し、長い修業期間を経て昇段したケースも多かった。

IV. まとめと今後の課題

本研究の結果から、女性剣道と昇段には密接な関連があることが推察される。分析を進める中で、頻出した用語には家族(子供・夫)、稽古、合格、不合格などが挙げられた。また、30・40代以降に剣道を始めた女性剣士の存在は興味深い。今後は女性の剣道活動の開始と家族、稽古環境との関連についてさらなるデータを収集すると同時に、女性剣士が各々の剣道活動にどのようにして昇段を組み込んでいるのかを明らかにする。

引用文献

- 1) 全日本剣道連盟：年度別登録者推移一覧表(令和4年3月31日公表)
- 2) 月刊剣窓：通巻第486号, 11, 2022.
- 3) 剣道時代：大人開始組の七段合格体験記, 4月号, 119 - 122, 2022.
- 4) 剣道日本：特集 これが私の進む道, 9月号, 38 - 41, 2021.

本研究は JSPS 科研費 JP23K10767 の助成を受けたものです。

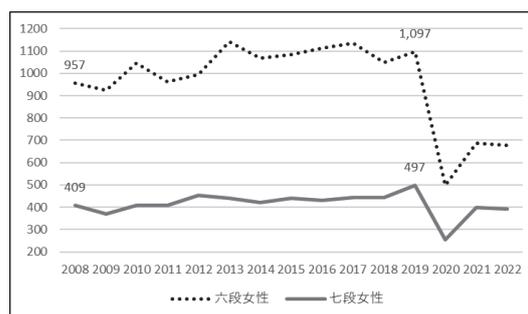


図 1. 六・七段審査の女性受審者数の推移

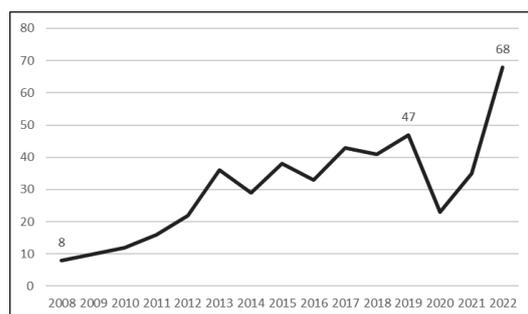


図 2. 八段審査の女性受審者数の推移

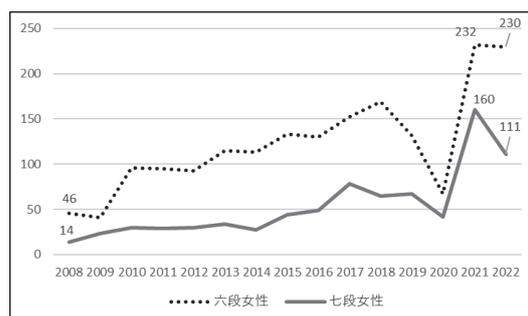


図 3. 六・七段審査の女性合格者数の推移

新当流槍術に関する一考察

中越泰士郎（筑波大学大学院） 酒井利信（筑波大学） 大石純子（筑波大学）

I. 研究の背景及び目的

日本の伝統的な身体運動文化である武道は、これまで多様な文化から影響を受けつつ独自の発展を遂げてきており、その文化の中でも宗教性は特に重要なものである。武道の宗教性に関しては、主に剣術を対象として仏教・禅からの影響が語られてきているが、近年、酒井利信は禅を中心とした影響があった以前、中世の時代に、神道の影響があったことを指摘している。また、その中で、特に塚原ト伝が創始した新当流に着目しており、そこにみられる神道的影響について言及している。しかし、この中世という時代を改めて問い直した時、戦いの場で行われていた武術はいまだ未分化の総合武術であり、新当流にみられる神道的な宗教性を総合的に把握するためには、剣術に限らず、他の武術に関する著述についても検討をしていく必要があるといえる。塚原ト伝は剣術のみならず槍術にも熟達しており、新当流においても槍術が剣術と同様に重要視されていたことが知られている。そこで本研究では、新当流の槍術にみられる神道的宗教性を紐解くことで、新当流における神道からの影響を総合的に明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究と問題の所在

新当流に関しては、これまでも多くの研究がなされてきており、主なものとしては二宮恭子（2021）、数馬広二（2009）、酒井利信（2003）、岡田一男（1975）らのものが挙げられる。特に酒井は天保13年に大月関平が著した『兵法自観照』にみられる「一の太刀」や「靈劍呪振の太刀」などの技術について、詳細な検討を行っている。まず「一の太刀」については、塚原ト伝が鹿島神宮に一千日もの間参籠し、靈夢により会得した技術であるとしており、この技術には誦靈劍のイメージが大きく関係していることを指摘している。また「靈劍呪振の太刀」に関する記述では「黄泉の国神話」が援用されており、この技術が「黄泉の国神話」における呪劍を振る技術を背景に含むものであったことを指摘している。二宮は、同様に『兵法自観照』を用いて新当流における神道的宗教性について詳細な検討を行っており、流儀・技術観・流派の理念などの内容が述べられている記述中に、様々な神話が援用され、独自の神話的イメージが形成されていたことを指摘している。

しかし、これらの先行研究は全て新当流剣術にみられる神道的宗教性を明らかにしたものであり、槍術にみられる独自の神道的影響や、剣術・槍術双方を含む新当流全体の神道的宗教性については検討がなされていない。本論の問題の所在は、この辺りにある。

Ⅲ.研究方法及び研究資料

近世以前の武術流派は徹底した秘密主義をしいていたこともあり、その詳細について記すことは少ないが、新当流には天保 13 年（1842）に大月関平が著した『兵法自観照』という大部の書がある。本研究においては、主にこの貴重なテキストを取り扱うこととする。また、『兵法自観照』には、鹿島・吉川家文書とは別に亀山・加藤家文書が現存している。当史料を筑波大学名誉教授である渡邊一郎が判読し、さらに新当流槍術（本間流）の伝書など、未収録の資料を付載した武道伝書聚英 11・13 集合冊『兵法自観照』があり、当史料が筑波大学武道学研究室に所蔵されている。本研究では、この貴重な史料を Word ファイル化し、その上で槍術に関する伝書の中から神話や神名がみられる文脈を抽出・把握し、新当流の槍術にみられる神道的宗教性について分析・考察を行っていく。

Ⅳ.結果および考察

本論で明らかになった点を以下に示す。

- ・『兵法自観照』には、「当流中興ト傳斎、上矛の神史靈象を恐拜ましくて、鎧法の術を開示給ふ」（『兵法自観照』,p.309）とあるように、槍術と「上矛」を結びつける記述が多くみられる。また他の記述から、「上矛」は「廣矛」と同様の矛を指していることが窺え、この「廣矛」は香取神宮の神宝でオオクニヌシに由来するものである。「上矛」については、神などの上目の者が扱うもので、下々が扱うものではないという記述もみられ、このことから、新当流はオオクニヌシに由来する「廣矛」・「上矛」を槍術と結びつけることで、槍術の神聖性を認識していたと考えられる。
- ・先行研究において二宮は、『兵法自観照』における新当流剣術に関わる記述が、「国譲り神話」を援用し、薙霊剣との関係性を示すことで剣術の神聖性をオーソライズしていることを指摘している。さらに記紀神話における「タケミカヅチが剣を逆向きに地面に刺し、その剣先に座って国譲りを迫る」という記述が、「逆向きに刺した剣の前に座り、国譲りを迫る」という内容に改変されながら援用されていることにも言及している。新当流槍術においても「国譲り神話」を援用した文脈がみられたが、そこではオオクニヌシがタケミカヅチとフツヌシの二柱に、国を平和に治めるために「廣矛」を授ける場面が援用されている。このことから、剣術は「国譲り神話」にみられる薙霊剣に関わる記述を挙げながら、その神聖性をオーソライズしていたが、槍術に関しては、「国譲り神話」の中でも、槍と関係の深い「廣矛」に関わる部分を援用して、その神聖性をオーソライズしていることが窺えた。
- ・以上から、これまで新当流の剣術に関する先行研究においては、薙霊剣やタケミカヅチに関わる神話が援用され、呪術性や神聖性が認識されていたことが指摘されてきたが、槍術においては、「国譲り神話」の異なる場面を援用しながら、「廣矛」・「上矛」との結びつきを強調することで、その神聖性をオーソライズしていたことが明らかとなった。その他の詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

佚齋樗山の思想形成に関する一考察
—熊沢蕃山からの影響に着目して—

寒川 祥(筑波大学大学院) 酒井利信(筑波大学) 大石純子(筑波大学)

I. 研究の背景及び目的

日本発祥の伝統的な運動文化である武道は、近代以降世界中で愛好されつつ、独自の発展を遂げてきた。武道実践者の中でも、日本で伝統的に培われてきた文化性に魅力を感じる者は多く、そのような武道の伝統性・文化性を問い直すことは、今後国内外において武道がさらなる発展を遂げるために大きな意義を有するといえる。武道史上において、近世期の武士社会における武術・武芸は、近現代武道へとつながる伝統性・文化性が育まれた重要な時代であり、これまでも多くの関連する研究がなされてきている。その中でも、特に剣術に大きな影響を与えた人物として知られるのが、佚齋樗山である。佚齋樗山は万治2年3月27日江戸に生まれ、神・儒・仏・老・荘・禪に造詣が深かった人物であり、『河伯井文談』『田舎荘子』『天狗芸術論』などの著作がある。特に『田舎荘子』所収の一章である「猫の妙術」は道家思想の啓蒙書として有名であり、酒井利信は「武道における日本的技術観を窺い知ることのできるものとしては、やはり近世中期に刊行された『猫の妙術』をあげるべきであろう」(酒井,2020)として、佚齋樗山が著した「猫の妙術」から武術・武芸にみられる「日本的技術観」の伝統性を窺うことができるとしている。「猫の妙術」は現代においても多くの剣道家が愛読している書であり、また江戸無血開城の立役者である山岡鉄舟も座右の書とするなど、近現代への影響も大きい。この佚齋樗山については、これまでも多くの研究がなされてきており、樗山の思想形成に江戸時代初期の儒学者であった熊沢蕃山が大きな影響を及ぼしたことが指摘されてきた。しかし、具体的にいかなる部分で蕃山から樗山への思想・技術観的影響があったのかに関しては、未だ検討の余地が多く残されており、この点を紐解くことは、近現代へと大きな影響を与えた近世剣術の伝統性・文化性の形成過程をより詳細に把握する上で非常に重要である。

以上から、本研究では佚齋樗山の思想について、特に熊沢蕃山からの影響を具体的に明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究と問題の所在

熊沢蕃山から佚齋樗山への影響に関する主なものとしては、中野三敏(1981)、大保木輝雄(2022)、湯浅晃(2001)、田中宏(2008)らのものが挙げられる。中野は、蕃山と樗山にみられる、学問に対する態度や心法、話柄、引証、叙述などの類似点を挙げ、直接的に蕃山の文章を引用したところは見られないものの、樗山が蕃山からの影響を強く受けていることを指摘している。大保木は、樗山の『天狗芸術論』が熊沢蕃山の『芸術大意』をモデルに執筆されたことを示唆し、『芸術大意』の冒頭「人は動物なり」から始まる内容が樗山

の『天狗芸術論』においても同様にみられることを指摘している。

以上の様に、先学では熊沢蕃山から佚斎樗山へ思想的な影響があったことが指摘されているものの、『芸術大意』から『天狗芸術論』への内容的な影響を少々示唆するに留まっている。また、樗山の代表的な著作である「猫の妙術」にみられる、蕃山からの影響について考察を行ったものもみられない。

そこで本研究では、樗山の代表的な著作である「猫の妙術」と『天狗芸術論』に、具体的に蕃山からどのような思想的影響があったのか、という部分を問題の所在とする。

III. 研究方法及び研究資料

研究方法としては、熊沢蕃山・佚斎樗山の著作を取り扱い、それぞれに共通するキーワードや文脈を抽出し、比較検討を行うことで、熊沢蕃山から佚斎樗山へ受け継がれた思想・技術観について分析・考察を行っていく。

具体的に取り扱う研究史料は、以下の通りである。

- ・熊沢蕃山『芸術大意』（山田次郎吉編『剣道叢書』水心社）
- ・佚斎樗山「猫の妙術」（緑川亨『新日本古典文学大系 81 田舎荘子』岩波書店）
『天狗芸術論』（武術書刊行会『新編 武術叢書(全)』人物往来社）

IV. 結果及び考察

まず、先学で示されていたように、熊沢蕃山『芸術大意』の冒頭、「人は動物也」と、佚斎樗山『天狗芸術論』の冒頭、「人は動物なり」の記述がほぼそのまま引用されたものであることが改めて確認できた。さらに、先学で示されてきたこれらの内容以外にも、熊沢蕃山から佚斎樗山へ、思想的な影響があった内容が多く確認された。それらは主に心法に関する記述で、「我も無く敵も無し」、「我有る時は敵あり」などの敵と対峙した時の心情を表す内容や、「往くに象なく来るに跡無し」などの迷いを無くすべきであるという内容、技術に習熟することで精神が安定することを船頭に例えた内容、師弟関係や自得の重要性を説く内容などであった。また、蕃山が用いた易や古の言葉なども同様に用いられていた。

よって、熊沢蕃山『芸術大意』から佚斎樗山『天狗芸術論』、「猫の妙術」に受け継がれた思想が、具体的に明らかとなった。

加えて、『芸術大意』や『天狗芸術論』、「猫の妙術」でみられた「我有る時は敵あり」といった記述は幕末を生き山岡鉄舟の『剣禅話』や、明治から昭和を生き加藤咄堂の『剣客禅話』といった著作にも確認できており、熊沢蕃山から佚斎樗山、佚斎樗山から山岡鉄舟・加藤咄堂といった近世から近代へと、思想的な繋がりがある可能性が考えられた。

その他の詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

大日本武徳会における武術教育に関する一考察
—青年教育に着目して—

筒井雄大（国際武道大学） 酒井利信（筑波大学） 大石純子（筑波大学）

I. はじめに.

武士がいなくなった明治維新以降、「武術」が国民教育の手段として位置づけられていくことは、武道史研究における重要な視点として研究が進められてきた。その中でも特に、明治 28 (1895) 年から昭和 21 (1946) 年まで日本の武道を統括する最大規模の武道団体であった大日本武徳会の活動は注目に値する。

木下 (1965) は「学校体育への武術の制度的位置づけとこれを担当する教養ある武術教員の養成という点で、本会は武術教育の近代教育への位置づけに成功」したことを指摘しており、武術が国民教育に位置づけられる過程において、武徳会が重要な役割を果たしたことが述べられている。

こうした事業展開について坂上 (2018) は、軍事に直結する種目に重点をおいてきた武徳会の武術事業方針が、日露戦争以後、実質的に修正されたことを指摘しており、武術教員養成のための学校設立や「青年」への対応が強調され始めたことを言及している。

しかし、これまでの武徳会研究において、なぜこの時期にこうした新たな事業展開が推進され始めたのかについては十分な検討がなされてこなかった。

そこで本研究では、日露戦争終戦直後の明治 39 (1906) 年 4 月に武徳会会長へと就任した大浦兼武の言説に注目し、武術による教育を目的とした事業の推進や「青年」への対応が強調された要因を明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究と問題の所在

木下 (1965) と坂上 (2018) の論考を踏まえると、日露戦争終戦後の武徳会において、武術教員の養成を担う専門学校の設立が急速に進められたことが窺えるが、同時期に「青年」への対応も強調されはじめたことが窺える。しかし、その要因や経緯については、これまでの武徳会研究において詳細な検討は進められてこなかった。

特に、4 年の構想を経て設立された武徳学校の設立経緯については、時の会長大浦兼武が「農商務大臣トシテ欧米ヲ視察スルニ方リ英國ニ有名ナル「イートン」の學校ヲ觀テ深く感スルトコロアリ益々其ノ信念の加ハルアリテ明治廿九年八月幹部及ヒ常議員會ニ對シ其ノ信念を披瀝シテ、賛同ヲ求メ副會長木下廣次氏ヲ委員長トシ」設立が進められたとされているが、それ以上の設立経緯については詳細な分析が行われてこなかった。また「青年」への対応が強調されたことについては、軍事に直結する種目に重点をおく事業方針から、剣術・柔術に重点を置く事業方針に変化した要因を考察するに留まり、「青年」への対応が強調された直接的な要因については指摘されてこなかった。

また、全日本剣道連盟の報告では「武徳会の会員数の急激な拡大の背景には、ある程度の

普及をみていた青年団の武道に注目し、全国各地の名もなき武道実践者を積極的に取り込んで、武道人口の拡大と武道の全国的普及を目論んでいたということができよう」と指摘され、武徳会が青年団の活動に注目していた可能性を取り上げているが、現状、武徳会と青年団との関係性を指摘することができる資料・情報は提示されていない。

この辺りに本研究の問題の所在があると言える。

III. 研究方法

本研究では、『大日本武徳会沿革』に加え武徳会研究において主として扱われてきた京都府の『日出新聞』（1897年に『京都日出新聞』へと改題）、また先学では十分な分析が行われてこなかった『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』も対象として分析を行う。

また、中嶋（2017）によって、武徳会の実態を把握する上で有益性が指摘される『武徳誌』『武徳会誌』についても詳細な分析を行う。

上記に示した資料を中心として、大浦の言説を抽出し、武術による教育を目的とした事業や「青年」を対象とした主張に関する記述について、文献学的手法によって分析を行う。

IV. 結果及び考察

日露戦争終戦後の事業拡張計画における重点事項の一つとして、分会に対する群町村旗章の制定が挙げられていたが、武徳会は新たに各府県支部の下部組織として各町村に分会を設置することを推進していく。これによって地方の末端地域にまで武術事業の展開が可能となっていくが、大浦の主張を踏まえると、分会の設置に付随して進められた分会場（道場）の設置は、「役に立つ兵隊となるよう男子の体育を20歳までに仕上げる」という大浦の理想のもとに進められたことが確認できた。そして、この理想を推進する理由として語られるのは露国の報復的な戦争への危惧であり、武徳会において「青年」への対応が強調された一つの要因として大浦の理想があったといえる。

ただ、この理想を実行した効果として主張されたのは、地方青年の風儀改善であったことは特筆すべき点として挙げられる。全日本剣道連盟の報告では、「総括的に見れば青年団と武徳会とでは武道の目的意識は異なっていた」とされるが、分会設置の効果として地方青年の「風俗矯正」が挙げられていたことは、「青年団」の「風紀改善」という目的と重なっていることが確認できた。大浦の演説や分会に関する記事に「青年団」や「青年会」等の用語は確認できなかったが、全国各地の地方自治体に存在した「青年団」を通じて、青年の武術奨励を行おうとしていた可能性は十分に考えられると言える。

武徳学校の設立経緯については、大浦の欧米視察が、武徳学校設立の前年である明治43年（1910）3月から9月であったことを示し、大浦がイギリスのイートン校に影響を受けた可能性があるのは、明治43（1910）年7月であったことを身体運動文化学会第27回大会において発表済みであるが、本研究では、この武徳学校設立に際して、青年の墮落や品性の乱れが大浦の主張において強調されはじめていたことが確認できた。そして、この主張がなされた要因については当時の青年社会の状況が大きく関係していたと言える。

20世紀初頭の欧州における武士道論に関する一考察
堀川 峻(筑波大学) 酒井利信(筑波大学) 大石純子(筑波大学)

I. はじめに

現代において武道は「武士道の伝統に由来する(日本武道協議会,2017)」運動文化と定義されており、その文化性は「武士道」の語で表現されながら国内外に発信されている。海外、特に欧米においても武士道に表徴される武道の文化性へ関心を抱く者は多く、また欧米への武道普及と関連する1つの要素として、近代以降の武士道思想伝播があったことも指摘されている(橋本,2013)。近代以降の欧州への武士道思想伝播に関しては、これまでも少なからず研究が行われてきており、主に武士道が近代的な思想の影響を受けつつ、いかに伝播してきたのかという観点から考察が行われてきたといえるが、日本国内で培われた武士道の文化性・伝統性と欧米への武道普及との関連性についての議論を深めていく上では、近代的な思想からの影響に拘泥することなく、近世以前における武士道の歴史や近代日本へと通ずる武士道の伝統性が、欧米でいかに理解されていたのかについて検討していく必要があるといえる。そこで本論では、欧州で武士道が注目され始めた20世紀初頭において、ドイツのLudwig Riess(以下、ルートヴィヒ・リース)とフランスのDe la Mazelière(Antoine Rous de la Mazelière 以下、ラ・マズリエール)という2名の歴史学者が著した武士道論に焦点を当てる。彼らは、欧州で培われた歴史観を背景に武士道について詳述しており、それらは欧州における武士道思想の理解に少なからざる影響を及ぼしていった。よって、本研究は20世紀初頭に欧州で武士道の歴史や伝統性がいかに理解され、伝えられていたのかについて、歴史学者2名の武士道論に焦点を当てて明らかにすることを目的とする。

II, 先行研究と問題の所在

欧州への武士道思想伝播に関連する主な先行研究としては、細川伸二(2003)や橋本順光(2013)、Oleg Benesch(2014)、Sarah Jordan Panzer(2016)、ムスタツェア・アレクサンドラ(2023)らのものが挙げられる。これらの先行研究では、1900年前後から始まる「武士道ブーム(笠谷,2017)」中に日本国内で語られた武士道論が、欧米においては「近代的な発明」であるとされていたこと、そして日本の戦争勝利によって欧米で武士道への関心が高まっていったことなどが指摘されている。また本研究で取り上げる歴史学者、ルートヴィヒ・リースとラ・マズリエールの武士道論に関する先行研究としては、古川哲史(1937)、原潔・永岡敦(2015)、関幸彦(2015)、山崎ゆき子(2016)、Naoichi Naka(2023)らのものが挙げられる。これらの先学では、彼らの日本論・武士道論が日欧双方に影響を与えていたことが認められているものの、武士道論の内容については詳細な検討がなされてきていない。つまり、先行研究では欧州へ伝播した武士道思想にみられる近代的な思想との関連性や、リース・マズリエールの影響力について言及されているものの、彼らが欧州で培った歴史的な素養を背景に、いかに武士道の歴史や近代へと通ずる伝統性を語ったのかについての検討はなされてない。この辺りに本研究の問題の所在がある。

III. 研究方法及び研究資料

研究方法としては、まず本論の前提となる日本国内の武士道思想史について先学から把握し、その後リースとマズリエールの出自や学術的背景について概観した上で、彼らが欧州で培われた学術的背景を以て、いかに武士道の歴史を論じ、近代武士道へと通ずる伝統性を語ったのかについて考察を行っていく。なお、文献資料は、主にドイツ語で著された『Allerlei aus Japan』（ルートヴィヒ・リース）、フランス語で著された『LE BUSHIDO』（ラ・マズリエール）の原文を用い、引用の際には訳文を付することとする。リースの著作に関しては、原潔・永岡敦が適切な訳文を出版しているため、当文献から引用する。マズリエールの著作については古川の翻訳があるものの、1987年に出版された古いものであり、また一部割愛されている部分も見受けられるため、古川の訳を参照しつつ、著者によって翻訳を行う。

IV. 結果および考察

リースは、大和魂と武士道を明確に区別して語っていたが、大和魂と明治以降の「俗化した形態」の武士道には、親近性を認めていた。また、明治以降の武士道を語る場面では批判的な見解を示していたが、江戸時代以前の武士道を語る際には自身の見解や意見を論じることはなく、あくまで彼の歴史学的な立場である「実証主義」に基づく姿勢がとられていた。その上で、武士道の歴史的な端緒を江戸時代初期にみており、儒教の影響を受けて近世期の武士の思想を主導した「士道」的な「礼法」が、士族によって近代へと受け継がれていったことを挙げながら、それこそが武士道の「最良の伝統」であると考えていた。

マズリエールは、当時欧州の歴史学で一般的な認識として広まっていた発展段階論を基に、中世を「封建制」、江戸時代を「絶対王政」と認識しており、武士道の歴史にもその間に思想的な隔たりを見出していた。その中で、武士道が理論的に体系づけられたのは合理主義へと進んでいく17世紀以降の「絶対王政」下であるが、武士道の「本質」は、中世の「封建制」において育まれた「軍事的な道徳」や、仏教に代表される「宗教」にあると考えていた。そして、マズリエールは中世・鎌倉時代における八幡信仰の重要性に言及し、そこで培われた宗教的な側面が近代へも継承される武士道の伝統性であると考えていた。古川(1957)は、近世「士道」が源平時代以前の武士の思想へ回帰することを主張していたと指摘しているが、マズリエールが中世・鎌倉時代に遡って、その「本質」や伝統性を論じたことから、そのような「士道」の要素と類似した傾向を窺うことができた。

このように、リースとマズリエールの武士道論では、欧州で培われた学術的な素養を背景に、武士道の歴史や伝統性について異なる解釈がなされていたものの、それぞれが近世期の「士道」的な要素を受け継ぎつつ、武士道の歴史や伝統性を論じていたことが明らかとなった。さらに、本論で明らかになった点からは、近代において武士道が欧米へと「伝播」していたのみでなく、独自の視点から「受容」されていた事実が明らかとなったといえ、今後さらに近代武士道論を国際的な視野から捉える上で重要な知見が得られたといえる。

詳細な考察については紙面の都合上割愛する。

「体育 Study of Taiiku」とその哲学基盤、Well-Being

林 洋輔（大阪教育大学）

学問としての「体育学 Study of Taiiku」を根底で支える哲学基盤、および体育学がその達成を期す Well-Being の実質解明に向け、その問い方・論じ方を明らかにする。

「体育学 Study of Taiiku」は、人間の身体活動を研究対象とする総合科学である。その研究対象としては「身体教育 Physical Education」とも呼ばれる「体育 PE」、勝利や健康や充実感など身体活動を経て得られる価値の達成を期した「スポーツ Sports」、さらにはいわば己の生活を磨く尽力とも言うべき「エクササイズ Exercise」が含まれる。人文科学、社会科学そして自然科学に跨る体育学は、今を生きる人間の健康、教育、地域貢献、産業の興隆および国際交流など今も八方に研究成果の光芒を放つ。

ところでこの体育学は、いま新たな隘路に逢着している。すなわち、体育学が今後に向かう活動の指針とその基盤をめぐる議論である。21世紀に入ってから体育学の主要研究者が参画する日本学術会議の「提言」および「回答」に着眼しよう。2008年、2011年、2017年そして2020年において、日本学術会議における健康・スポーツ科学関連の部会は体育学の未来に資する指針についての施策を打ち出してきた。その施策の要諦を言えば、まずは子どもの健全な身体発育をスポーツ科学の論拠で裏付ける。次にスポーツ政策学の言説に乗せてそれらの論拠を社会発信する。そしてこの双方を踏まえて自らの——体育学の——社会的位置を確保するとの戦略が見えてくる。さらに本年9月に発布された最新の提言

では、さまざまな社会状況にある人々をいわば総合的に巻き込むことでスポーツの文化としての定着を図る意図が読み取れる。巷間に流布する五輪や一流競技者の醸し出すスポーツのイメージとは裏腹に、身体活動文化——つまり身体運動文化——の着実な湿潤を日本国内外に図ろうとする動きが現行の体育学においては確認できるのである。

以上を受け、今後研究者が実質解明を期すのは次の二つである。第一に、体育学の進む指針を根底で支える哲学の実質。第二に、体育学の昨今における議論の焦点として研究者から発言が相次ぐ Well-Being の実質である。本発表では双方に最終的回答を与えるのではなく、むしろ「体育学を支える哲学とは」、そして「体育学が期する Well-Being とは」といった巨大な問いに対する問い方、論じ方を明らかにする。

暫定的な回答として言えば、体育学を支える哲学とは現状を常に乗り越えて無際限の卓越を志向する「心身の尽力 Spiritual Exercise」である。他方で体育学が期する Well-Being とは、自らの現状を常に乗り越えようとする正にその過程にあるとの答えを提出する。以上から、発表者は「体育学 Study of Taiiku」の現状と未来への歩みを問う。

本発表は必要最小限の事項を報告し、質疑応答を可能な限り拡張した展開を試みる。また本発表は本年 12 月 13 日～16 日まで発表者が日本体育・スポーツ・健康学会派遣事業として赴くインド・カルナータカ州に開催のインド体育・スポーツ国際学会招待講演 (International Conference on Physical Education and Sport Science: ICPESS, Manipal Academy of Higher Education, Karnataka, India) の講演骨子を表明するものである。

反射マーカを用いた伏臥位における体幹側屈角度の計測

○金子竜大^{1, 2)}、来田宣幸³⁾、権野めぐみ³⁾、野村照夫³⁾、山本晴基⁴⁾、中谷敏昭¹⁾

¹⁾ 天理大学体育学部、²⁾ 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科、

³⁾ 京都工芸繊維大学、⁴⁾ 近畿大学スポーツ振興センター

【背景および目的】

体幹部の可動域や柔軟性は、高強度のパフォーマンスが求められる競技において四肢と体幹の運動連鎖のために重要な能力である。これまでの体幹側屈の計測は、日本リハビリテーション医学会が定めている関節可動域ならびに測定法の胸腰部側屈とされており、胸椎と腰椎を分けて評価することができず、この既存の測定法では、脊柱の分節の中でどこが最も動いているかを明らかにすることができない。しかし、反射マーカを配置することで、胸部と腰部に分節して計測が可能である。さらに、計測姿勢を伏臥位とすることで、側屈動作時に伸展、屈曲、回旋動作といった代償動作を防ぐことが出来ると考えられる。そこで本研究では、伏臥位における体幹部の側屈可動域の試行間信頼性と、左右最大側屈角度を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象者は 20～21 歳の健康な水泳部に所属する大学生 7 名（男性 5 名：身長 174.5 ± 5.8 cm, 体重 66.5 ± 6.2 kg, 女性 2 名：身長 157.5 ± 1.5 cm, 体重 49.1 ± 3.9 kg）とした。本研究の趣旨と危険性を説明し、研究参加への承諾を全員より得ている。対象者の中に体幹側屈角度の計測に影響のある者は含んでいない。

体幹側屈角度の計測時は、マットを敷いた床に伏臥位となり、顎の下に手を組ませた状態とした。股関節が大きく動かないように検者が被検者の上から両手で股関節を固定した状態で計測を実施した。体幹側屈角度の計測は、直径 6 mm の赤外線反射マーカを第 7 頸椎棘突起、第 3 胸椎棘突起、第 7 胸椎棘突起、第 12 胸椎棘突起、第 7 胸椎棘突起と第 12 胸椎棘突起の midpoint、仙骨、左右上後腸骨棘の計 8 箇所に貼付した。二次元動作解析では、スマートフォン (Samsung Galaxy S22) 背面カメラお



よび LED ビデオライト (SmallRig 製) を対象者の真上から背中が映るように設置した。撮影したビデオ画像は、パーソナルコンピュータに取り込み、ビデオ動作解析システム (DKH

社製，Frame DIAS-V) を用いて，身体に貼付したマーカーをデジタル化した．得られた二次元座標は，二次元 DLT 法を用いて実長換算した．

対象者には，床と身体が離れないように最大限側屈を行うよう教示し，数回練習した後左右交互にそれぞれ 2 回側屈の計測を行った．

測定値はすべて平均値と標準偏差で示した．体幹側屈角度のテストの信頼性は，2 回の測定値を一元配置分散分析により差を検討し，級内相関係数を算出した．

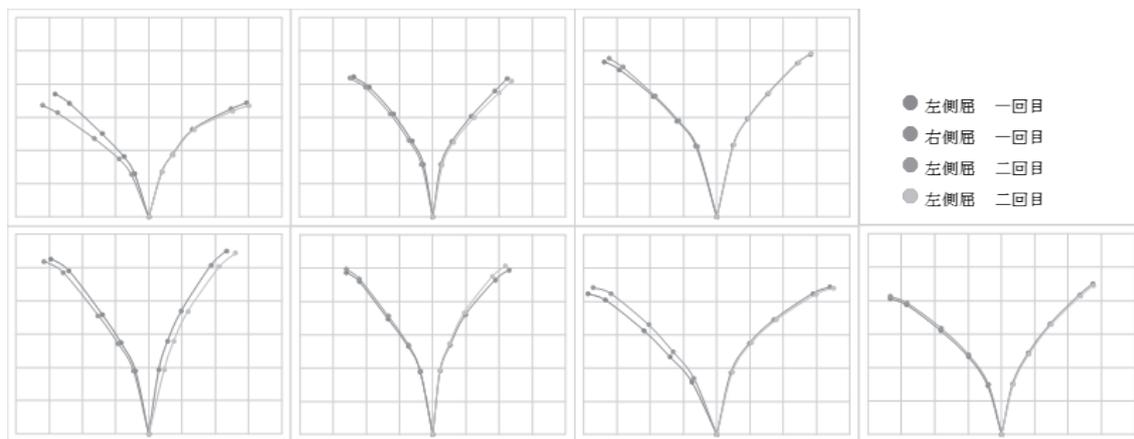
統計解析には SPSS Statistics 25.0 (IBM 製) を用い，有意水準は 5% とした．

【結果】

最大側屈は，左側屈の 1 回目は 34.6 ± 5.6 度，左側屈の 2 回目は 35.2 ± 5.8 度，右側屈の 1 回目は 30.7 ± 6.4 度，右側屈の 2 回目は 31.6 ± 6.7 度であった．

これらの級内相関係数は，左側屈が 0.877，右側屈が 0.972 であり，左右どちらも高い試行間信頼性が得られた．

氏名	左右側屈の最大値			
	左側屈		右側屈	
	1回目 (°)	2回目 (°)	1回目 (°)	2回目 (°)
C.H.	37.2	43.6	40.6	42.0
K.K.	42.5	40.0	37.5	38.6
S.U.	39.4	39.0	31.3	31.7
Y.H.	29.5	30.9	28.3	30.2
R.K.	36.0	34.3	29.9	30.0
Y.T.	29.3	31.3	23.0	25.6
Y.I.	28.1	27.6	24.8	23.1
平均値 ± 標準偏差	34.6 ± 5.6	35.2 ± 5.8	30.7 ± 6.4	31.6 ± 6.7



最大側屈動作時のスティックピクチャー

【文献】

権野めぐみ，来田宣幸，野村照夫，松井知之，東善一，平本真知子，橋本留緒，幸田仁志，渡邊裕也，甲斐義浩，瀬尾和弥，森原徹 (2020) 体幹後屈角度と体幹・下肢障害および全身の各関節可動域の関係：ジュニアアスリートを対象として．京都滋賀体育学研究，36：20-28.

海洋スポーツの実践と移住

-ワークライフ・インテグレーションと Well-being に関する質的分析-

○松本 秀夫・小林 俊・鉄多加志（東海大学）

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し生活様式も従来に戻りつつある。しかし、テレワークやワーケーション、遠隔会議と言った新しい生活様式も取り入れられ新たな形態が模索されている。このような多様な生活様式において、仕事と生活の統合であるワークライフ・インテグレーション¹⁾が注目されている。高次の仕事と生活の統合は幸福で豊かな社会を構築するための重要な課題である。

我々はこれまでの研究で、海洋スポーツを長期間継続する愛好者が、関与の高まりから「仕事や居住地を変える」「コミュニティへの帰属を高める」など生活様式（ライフスタイル）の変容を行い快楽的ウェルビーイングが高いことを明らかにした。このように多くの人々が居住地の変更である移住を行っているが、居住地に焦点をあてた検討は行われていない。

そこで本研究は、アウトドアスポーツ実践者において移住（居住地の変更）経験および希望（物件探索中）を持つ人を対象として半構造化インタビュー実施し、移住を焦点とし、ワークライフ・インテグレーションとウェルビーイングの関係を質的に分析することを目的とする。

II. 調査対象及び分析方法

調査期日は、2023年3月～11月に実施した。研究協力者は、機縁法により募り、海洋スポーツを行っている人で移住した経験を持つ人（セカンドハウス・物件探索中）14名とした。サンプリングは歴史的構造化を準拠して行った。現在居住している場所は、O県およびK県とした。内訳は、仕事としている人5名、愛好者9名であり30分～40分程度の半構造化インタビューを実施した。質問内容は、実践している海洋スポーツ種目・経験、移住した時期・目的、レジャー関与の度合い、過去から現在のWell-being、ワークライフ・インテグレーションとした。面接は充分にインフォームドコンセント後、同意書に署名を求め、本人了承を得てICレコーダーに録音した。インタビューテキストは秘密保持契約を締結した業者にて文字起しを行った。分析は、TEM(複線径路等至性モデリング)を援用して、時系列に等至点、必須通過点、社会的方向づけ、社会的ガイド等から移住者の経験の多様性を導き類型化を試みた。また、プライバシー保護の観点から、研究協力者の個人情報についての記述は最低限にとどめる。尚、本研究は、東海大学人を対象とした倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号22151,23078）。

III. 結果及び考察

半構造化インタビューの結果、移住、海洋スポーツの開始、継続の過去経験、移住するタイミングと目的・決断、移住後の継続、コミュニティ、今後の展望、ワークライフ・インテグレーション、Well-being についてのコメントから、等至点 EFP、必須通過点 OPP、社会的方向づけ SD、社会的ガイド SG から考察を行った。

本研究の焦点となる<移住>に関して10名の協力者が移住前から海洋スポーツ実践者であり、ダイビング、サーフィン、スノーケリング、セーリングなどを実施していた。これら10名（O県9名、K県1名）と“海辺に住みたい”という動機があった3名（K県3名）、結婚後にご主人の家

業継続での移住1名（K県）の全てに理由は異なるが<移住動機>が必須通過点と考えられる。しかし必ずしも海洋スポーツを実施することが動機ではない。また、結婚後、ご主人の家業継続により移住した1名は<移住動機>に海・居住地の場所は関係してはならない。このように、移住前に海洋スポーツを実施していない4名は必ずしも経験者ではなく、移住後の<コミュニティ>が継続に重要であることがうかがえる。また、移住のタイミングは様々であり、O県では新型コロナ感染症に伴う移住が1名、他1名は、現在も会社経営を継続しているが、ほぼセミリタイアで仕事の区切りを決めて移住後も充実した生活を送っている。コロナ感染症関係での移住は、ご主人が建築関係の資格を所持していることから、給与は下がるが仕事を探す苦労はなく移住し、充実したダイビング活動と生活を送り Well-being も高いといえる。

K県移住は、海辺に住みたいという動機から移住後にアウトリガーカヌーを始めている人が多くO県移住とは異なっている。しかし、いずれも移住後の<コミュニティ>に対する思いは高く重要であった。しかし、O県においては“移住者”はあくまで本土からの“移住者”でありK県移住者とはとらえ方が異なっていた。<コミュニティ>は、社会的方向づけと社会的ガイドのいずれとしても働くことが考えられ、抑制的に働く場合（社会的方向づけ）と、受け入れられる場合（社会的ガイド）のいずれにも働き、抑制的な場合は、O県から地元に戻る可能性が示唆されている。

仕事にしている人5名中4名は経営者、1名はインストラクターとして勤務している。移住前に資格を取得、島で仕事をしたいという<移住動機>を持ち5名とも離島ではなく、本島に<移住>し仕事をしている。居住期間は様々であり、経営者は新型コロナの影響による廃業などは発生していないが、1名のインストラクターは他の島での経営を諦めて現在のショップに勤務している。仕事の相手は観光客でありコミュニティは移住者同士の比重が高い。しかし、海洋スポーツ以外のコミュニティで深くかかわりを持つ人も存在し沖縄空手を長期間実施していた。このようにO県、K県ともに愛好者は、仕事、生活、海洋スポーツを満喫し、Well-being は高くバランスをとっているという感じはないという。同様に、仕事にしている人は、仕事、余暇、生活は順調であり、移住後の生活は、仕事、活動、コミュニティなどを含め、ワークライフ・インテグレーションによる Well-being が高いことが示唆されている。しかし、今後、親の介護や仕事の継続なども含め、戻る可能性を示唆する人もいた。また、K県在住者には Well-being は高いが、必ずしも家庭・仕事と活動がうまく統合しているとは言えない人も存在した。以上のことから対象者を3つに類型化することが可能であった。①移住前から海洋スポーツを目的とした移住を行い仕事としている、②移住前から海洋スポーツを含めた離島ライフを目的としている、③移住後に海洋スポーツを選択し継続している。個々の状況は異なるが経路の類型として捉えることは可能であると考えられる。

IV. まとめ・今後の課題

海洋スポーツ実践者を対象に移住を焦点とした半構造化インタビューを実施し TEM を援用した質的分析を試みた。その結果、個々の状況は異なるが総じて、移住による海洋スポーツライフを満喫し、ワークライフ・インテグレーションによる Well-being が高いことが示唆された。今後は量的調査研究において検証を試みるのが課題である。

引用文献

1) 平澤克彦・中村艶子編,ワークライフ・インテグレーション:未来を拓く働き方,ミネルヴァ書房 *
本研究は JSPS 科研費 21K11560 の助成を受けたものです。

ケガをせず動けるスポーツ選手をめざす

体づくりの教科書

セルフチェックとエクササイズ

松野慶之 著

スポーツに打ち込む人は腰痛や膝痛などを抱えることが多く、マッサージなどで痛みが軽減しても再発してしまうことが多い。そこで本書では、不調の原因を見つけ出すためのセルフチェックと、その原因を解決するためのエクササイズを紹介し、ケガで苦しむスポーツ選手に「痛みにくく、動きやすい体」のつくり方を教える。

●A5判・176頁 定価2,200円(税込) オールカラー

【主要目次】障害予防とパフォーマンスアップの関係性／体が動く仕組み／痛みにくく動きやすい「動きづくり」のコンセプト／セルフチェック／エクササイズ

「痛みにくく、動きやすい体」をつくる!



大修館書店

お求めは書店または小社HPへ。詳しい情報はこちら▶



3,800円+税

体育の学とはなにか

林洋輔 (著)

哲学者が問う、学問の未来。「身体教育」を超え、人間の身体活動すべてを射程におさめる総合科学。人文・社会・医学に及ぶ全16分野を眺望し、目指すべき未来を探る。学会賞受賞論文を基にした書き下ろし大著。



3,000円+税

キャンプセラピーの実践

発達障害児の自己形成支援

坂本昭裕 (著)

臨床心理士で野外教育専門家によるキャンプを活用した発達支援の試み。ADHD・ASD児を含む小グループでMTBや登山など冒険プログラムを体験。自己像や対人スキルの変化を統計的・質的研究から明らかにする。



2,200円+税

健康論

大学生のための
ヘルスプロモーション

電気通信大学
健康・スポーツ科学部会 (編)

パンデミックで加速する社会構造の大変革。その中で私達が心身ともに健やかに生きるためには、Well-beingの視点から新たな生命観、健康に対する考え方を提示する。『大学生のための「健康」論』を全面改訂した新版。



3,600円+税

スキー研究 100年の軌跡と展望

日本スキー学会 (編)

スノースポーツの科学、最前線。日本にスキーが伝えられて110年。スキーを愛し科学の眼で探究を重ねた先人の情熱と最新の研究成果。全8章：歴史、運動の科学、工学、医学、指導、安全、ツーリズム、中高齢者。

株式会社 道和書院

東京都小金井市前原町2-12-13 (〒184-0013)
TEL 042-316-7866 FAX 042-382-7279
E-Mail contact-us@douwashoin.com



直心影流の

軽米克尊

幕末から明治にかけて二世を風靡し、いまに
つながる剣道の祖のひとつとされる直心影流。
剣聖・男谷下総守信友、島田虎之助、勝海
舟ら多数の名人を輩出した名門流派ながら
も、その全容は明らかにされていない。この
謎に満ちた流派研究を集めた決定版。

A5判・378頁 6600円



近代日本の

武道論

〈武道のスポーツ化〉問題の誕生

A5判・624頁 8800円

中嶋哲也

「術」から「道」という考
えが誕生した明治期、「ス
ポーツ化」という言説が登
場した大正期、さらには
古武道の「発見」まで。
膨大な資料を検証し、変
容する「武道」と「スポー
ツ」の関係を明らかにする。武
道論を一新する大著。

21世紀の柔道論

〔編著〕藤堂良明・村田直樹

A5判・272頁 2200円

世界二百以上の国と地域で盛んに行われている柔道に関する歴史と未来を考察。
「文化史」「形の意義」「武術としての柔道」「競技としての柔道」「世界の柔道の
動向」など、21世紀に柔道を志す人間すべてにおくる新しい柔道論。

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427 <https://www.kokusho.co.jp>
*書店、または弊社までご注文ください。弊社へご注文の場合 4400 円以上 (税込み) のご注文で送料無料。公費対応可。*価格は税込表記。

地球と遊ぶ、時間をつくろう。

もっともっと自然の中へ出かけませんか
地球の上には、たくさんの驚きや発見があります
まだ見ぬフィールドへ
その入り口にモンベルがあります



Photo: Satoshi Konda

SINCE 1975
mont-bell



登山用品は、全国の「モンベルストア」へ!

機能的なアウトドア用品を
豊富にそろえてお待ちしております。

お近くのモンベルストアはこちらから▶



株式会社 **モンベル**



0088-22-0031



携帯電話 06-6536-5740

www.montbell.jp

KAZUTAKA



日本製

武道工房 一 貴



奈良市の小さな工房で甲手を製造販売しています。
「安全で使いやすく、無駄なく、シンプルに」
軽さ、耐衝撃、操作性、フィット感、全てがこの甲手に。



武道工房一貴では、小手をはじめ剣道具全てをお取り扱いしております。
また、愛着ある剣道具を長く、大切にお使い頂けるよう、どのメーカーの剣道具でも修理を受け付けております。自社で修理しますので余計なコストはかかりません。剣道着、袴に関しては、日本で唯一、糸から天然藍で染めて制作される武洲一ブランドをお取り扱いしております。ぜひ本物の藍色をお試ください。

桐原 弘貴

日本製甲子製造販売・剣道具修理、販売

〒630-8301 奈良市高畑町614-1
携帯 090-9984-5362
FAX 0742-24-0115
<http://www.kazutakanara.com>

祝 身体運動文化学会第28回大会



天

Ten

選ばれ続けてきた必然



峰

謹製 MINE-KINSEI

日本製
最高級ミシン刺剣道具



武道用品の総合メーカー
株式会社 **三ツボシ**

事業本部：TEL 077-535-9136 www.mitsuboshi-budo.co.jp
〒520-0357 滋賀県大津市山百合の丘 10-26



新しい剣の道へ誘う

株式会社 東京正武堂 特約代理店



北斗武道具

〒636-0123

奈良県生駒郡斑鳩町興留2-5-1

TEL・FAX 0745-75-6128

<http://www.hokuto-budougu.com/>

剣道・柔道・武道用品全般

加藤武道具店

〒899-5106

鹿児島県霧島市隼人町内山田1丁目8-3

TEL 0995-73-4637

FAX 0995-73-4638

株式会社 **天理時報社**

ドローン撮影

ホームページ

AR

アプリ

バリアブル印刷

電子書籍

パンフレット

ポスター

書籍

チラシ

YouTube
チャンネル開設



▲ホームページ

私達は印刷会社というカテゴリーを超えました

無制限の品ぞろえ。

本社/〒632-0083 奈良県天理市稲葉町80番地 TEL 0743(64)1411(代)

東京支社/〒113-0033 東京都文京区本郷3丁目16番4号 本郷天理ビル1階 TEL 03(5615)8983

チャンネル登録



あなたのスポーツ経験を社会でも活かせるよう、
私たち体育会出身スタッフがしっかりサポートします！

すべての“アスリート”たちに
体育会にしかできない就活がある

武器はキミだ。



2024年卒・2025年卒体育会学生
向けの就活支援サービスが充実



部活も就活も頑張る
体育会学生の就活をトータルサポート！
体育会学生限定の求人紹介イベントや
合同説明会を実施しています。



ジール就職サポートはアスリートの
みなさんの就職活動を応援します！



ジールができる3つのサポート
① オンライン・オフラインの合同企業説明会
のご案内
② 3000社の中からあなたにあった求人の紹介
③ 企業研究、書類添削、面接対策など就活の
悩みをまるっと解決



合同企業説明会で大手企業や優良企業の
選考免除・内定を獲得！
←就活イベントのご予約はこちら



就職活動における悩みをなんでも解決いたします！
←ご相談はこちら



天理大学

大学院体育学研究科体育学専攻 (修士課程)

A領域 (武道・スポーツ文化)

「武道」「スポーツ文化」を
人文・社会系学問領域から探究

B領域 (保健・スポーツ教育)

「保健教育」「スポーツ教育」
にかかわる問いを探究

C領域 (健康・スポーツ科学)

競技者に寄り添い、
支える指導に役立つ方法を探究



2024年4月改組 (2023年9月20日 文部科学省認可)

※改組後の学部・学科一覧

人文学部

宗教学科
国文学国語学科
歴史文化学科
心理学科
社会教育学科
社会福祉学科

国際学部

韓国・朝鮮語学科
中国語学科
英米語学科
外国語学科
- タイ語 - インドネシア語
- ドイツ語 - フランス語
- ロシア語 - スペイン語
- ブラジルポルトガル語

国際文化学科
日本学科
(留学生対象)

体育学部

体育学科

医療学部

看護学科
臨床検査学科

大学院

宗教文化研究科 宗教文化研究専攻
臨床人間学研究科 臨床心理学専攻
体育学研究科 体育学専攻